

小児科診療 UP-to-DATE

2014年4月16日放送

病児の遊びとおもちゃ

日本グッド・トイ委員会
理事 荻須 洋子

遊びは子どもの成長・発達には欠かせない、とても大事なものです。

これは病気の子どもにとっても大事なものであることに変わりはありません。特に入院や在宅治療のために家族や友達からも離れ、苦痛を伴う治療に立ち向かう子どもたちにとって、遊びは、気晴らしにもなるし、他者とのかかわりは社会性も促してくれます。病気であっても、毎日楽しく過ごす時間を持つことは、心の健康にも欠かせないと思います。さらに、手や体を使い創意工夫しながら遊ぶことは、身体の活性化にもなり、心も体も成長・発達が促されることでしょう。

子どもが病気で入院すると、それまでの環境が変わってしまいます。病気による痛みや不自由さの他に、家族や友達と離れて慣れない場所での生活は不安や寂しさを感じることでしょう。入院が長くなれば、発達にも影響が出てくると思いますし、学齢期であれば、学習の遅れも気になるところですし、様々な経験の不足も考えられます。その一助としても、楽しい遊びの経験やおもちゃが果たす役割は大きいと思います。

病気の子どもは、様々な制約の中にいるので、自分でおもちゃを用意したり、遊ぶ場所や一緒に遊ぶ人を見つけることが難しいと思います。そこで、医療関係者は、子どもたちに遊びの時間や場所、おもちゃなどの用意をすることも忘れてはいけません。今では、病院にも臨床心理士や保育士、また数は少ないですがチャイルドライフスペシャリストや子ども療養支援士という専門職の方も配置されるようになってきました。また、遊びのボランティアがいる病院もあります。こ

うした遊びを支援する人の存在は、さらに大事だと思います。



おもちゃは遊びを作り出す道具として必要だと思いますし、子どもの遊びの様子を見てみると、一つのおもちゃから次の遊びが生まれたり、会話が発展したり、他者との関わりが出てきたりと果たす役割の大きさを感じます。

家庭からも愛用のおもちゃをいくつか持つてくるとよいと思います。また、病院のプレイルームには、年齢や発達に応じたおもちゃがあるといいですね。プレイルームに行くだけでワクワクするような棚や壁の装飾の工夫もあるといいと思います。ベッドから離れて、少し自由度があるプレイルームで安心して、安全に遊びの時間を過ごすことは、ストレス解消にもなると思います。



最近病棟に行くと映像を見たり、電子系のおもちゃでゲームに興じているお子さんをよく見かけます。こうした遊びは一人の時間を過ごすのに向いているのかもしれませんが、しかし、年齢が低ければ低いほど、手を使って、おもちゃに触れたり、動かしたり、人と話をしたり、人がすることをしたりと実際の経験が必要です。

ままごと遊びは病院でも人気のある遊びですが、この遊びを見てみると、食べ物の名前を言ったり、ニンジンやキュウリを切ってみたり、なべに入れて調理をするマネをしたり、できたものをごちそうしたり、モグモグと食べるマネをしたり、一緒に遊ぶ子どもや保護者とやり取りをするなど様々な要素があって、よい遊びだと思っています。また、遊びが次々広がっていき、かなりの時間を集中して遊び込むことができます。特に付き添っている親ごさんも一緒に遊びやすいようで、楽しそうにやり取りしているのをよく見かけます。

トランプや将棋など対戦型の遊びも競争心やコミュニケーションを促します。ブロックやパズルなどは知的な刺激を与えるでしょうし、ビーズ遊びやひも通しは手先の器用さも促します。人形やぬいぐるみなどは生活のマネをするのによいおもちゃですし、自分の気持ちを投影して、気持ちを安定させることにも役立つことでしょう。

乳児用にもガラガラやオルゴールなどのよい音が出るものなどがあると思います。年齢の高い思春期の子どもたちもいますので、プレイルームとは別の落ち着ける場所があるといいと思います。そこには、ゲーム用品やコミック本などもあると思いますし、音楽が楽しめるようなものがあったらいいと思います。

このようなおもちゃは、安全で衛生的でなければいけません。おもちゃを管理する人が必要ですし、消毒をしたり、誤飲や怪我などの事故がないようにマメに点検することも大事だと思います。

病気によっては、発達に問題をかかえていることがあります。おもちゃに興味を持たない、できることが少ない、親としてどのようにかかわったらよいかわからないなど、悩みをかかえている方もい



ます。そういうお子さんにも遊びの機会を持って欲しいですし、その子なりの興味やできることを見つけて、一緒にかかわって欲しいと思います。もっと症状の重い、重症心身障害児の場合は表情が乏しく、喜びの表現がわかりにくいので、どんなときに楽しいのか、好きなことは何かなど家族から話を聞くことも必要だと思いますし、いろいろと経験させることも大事です。また、遊びの様子をよく観察して、笑顔以外の楽しさの表現、例えば目を動かす・じっと見ている・緊張する・体のどこかを動かすなどの変化を見逃さないことも必要だと思います。

また、いつでもどこでもおもちゃがあるとは限りません。そのようなとき、どうしたら楽しく遊びを展開することができるかを考えたり、またあるもので楽しく遊んだりする工夫も必要だと思います。おもちゃがなくても、特に乳幼児は人と一緒に遊ぶのが好きなので、いないいないばあや・じゃんけんなど体を使った簡単な手遊びをすると思います。くすぐり遊びやまねっこ遊びも子どもが好きな遊びです。

家庭にある日用品もよいおもちゃになります。台所用品ではステンレスボールや保存容器、小さな鍋などはよいおもちゃになります。楽器などがなくても、鍋や空き缶などをたたくと太鼓のような音が出ます。ペットボトルに水やビーズを入れたものもよいおもちゃになります。紙皿や紙コップやビニール袋などもおもちゃ作りのよい材料になります。このような身近な材料で簡単なおもちゃを作って遊ぶことは経済的にもいいと思いますし、子どもと一緒に作るができるようであれば、さらによい体験になると思います。

遊びは学習とは異なり、自分で作り出すものだと思います。ともすると大人は自分の経験から「あっ、そのやり方違っていい」とか「こうするんだよ」など、いろいろと意見をしたり、否定的な発言をしてしまいます。子どもの遊びの力を信じて、寄り添い、楽しさを共有できる余裕が持てると思います。また、子どもが今何に興味を示しているのか、どんなことにワクワクしているのか、一緒に同じ目の高さで感じることができると思います。



医療関係者の「そのおもちゃなあに?」「面白いね!」「上手にできたね。」などのちょっとした言葉掛けが、子どもの遊びの楽しさを増幅させると思いますし、子どもたちの自信や自己肯定感にもつながると思います。それは、病気の回復への力にもなっていくのではないかと思います。

「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>